



アメリカ童話から
17

松原至大

バスケットの子猫

うす墨色の子猫君が、初めての道を、元氣にかけていました。やわらかな毛でおおわれた尾が、小さな旗のように高く立っていました。その道は、とても広くて、ほこりつぽい道でした。両側は、高い木と深いやぶとで、境ができていました。この子猫君は、そこをお昼過ぎから、ずつと歩き続けているのでした。ここへ来るまでにどんなことがあつたのか、よく覚えていませんでした。なぜかといえば、生れて間もない子猫でしたから。

この子猫君は、生れてからの短いいく日かを、お母さんと、四匹のお兄さんたち、一匹のお姉さんといつしよに、町で送りました。

夜は、みんなであたたかなバスケットの中に寝ました。いつもやさしい声をしただれかに呼ばれて、おいしいミルクをいただきます。

春のある日のこと、そのやさしい声をした人が、

「まあ、まあ、この子猫たちのよく育つて行くこと。早くみんなに、よいお家を見つけてやらなければ。」
としました。

ちようどその日から、二日ほどしてそのお家のだれかが、そばのドアをあけつばなしにしておきました。その朝このうす墨色の子猫君は、とても元気で冒険をしたい気持ちになっていました。そこで、ドアをそつとぬけ出して外の空気を、いつばい吸いこみました。新鮮で、おいしい香がしました。なにもかも元気に育つ、生き生きとした香でした。風に吹かれてころがる、一枚の木の葉を追いかけました。もう一枚の葉が、そこへ飛んできました。子猫君は、それも追いかけてました。それは、子猫君を、裏庭から外の方へ連れて行きました。面白いので、そこがどこだか少しも気づきません。そのうちに、木の葉を追いかけることにあきてしまいました。子猫君は腰をおろしてあたりを見まわしました。なにもかもが、初めて見るものばかりでした。

「ニャーオ、ニャーオ。」と、子猫君はしずかになきました。「ぼく、ぼくのバスケットに帰りたいよう。きつとお皿まにミルクが残っているよう。」

そこで子猫君は、帰ろうとしました。けれど、まだ小さくて、それほど利口ではなかつたから、道をまちがえてしまいました。歩いてても、歩いてても、バスケットのそこには来ません。そして、今こうして歩いているのです。

もう太陽も低くなりました。さびしくはなるし、おなかもすいてきました。子猫君は、また腰をおろして、ぼくのついた手と足をふいて、さてこれからどうしたらよいのか、考えました。

栗鼠りすが一匹、木からおりてきて、子猫君をじつとながめました。そして、

「ヘロー、そこで、なにをしているの？もう、寝る時間ですよ。」
といました。

「ぼく、お家をさがしているの。ぼくのお家は、バスケットで、いつも今ごろ、ミルクがいただけけるんだよ。」
と子猫君が答えました。

この栗鼠は遠慮のない栗鼠で、いつもだつたら、笑い出すのでした。けれども子猫君があんまり無恥気で一生懸命だつたので、やさしく、こう言いました。

「ああ、そう。私は君に、バスケットをあげることはできないが、今晚のお宿はさせてあげますよ。私はあのかしの木の上に住んでいて、葉と小枝でできたきれいな巣を持っていますよ。なにか木の実をご馳走しましょう。

しかし子猫君は、その高い木を見上げると、ぶるぶるとふるえました。

「ああ、ありがとうございます。でもぼく、あんな高い木にはのぼれない。それに、ぼく、木の実はたべないんだよ。どうもありがとうございます。ぼく、帰ります。お家を見つけますよ。」

「じゃ、早く見つけなさいよ。」

こういつて、栗鼠は高い木のでつぺんの巢の中にはいりました。そして間もなく、眠つてしまいました。

子猫君は、また元気にかけて行きました。間もなく、妙なものに出会いました。身体は黒光りがして、背中に白くしまがありました。それは、スカンクでした。スカンクは立ちどまつて、子猫君を見ていました。

「今晚は、めずらしい方。どこへいらつしやるの？」

「あ、ぼく、疲れちやつた。お家を探しているの。」

と、子猫君は、めんどうくさそうに言いました。

「まあ、おかわいそうに、私といつしよに、いらつしやいな。あなた、きつと私の親類ですよ。私、ここから遠くない木の根の下に、よいお家を持っていますよ。」子猫君は、どうしたらよいのか、わかりません。

「ぼく、バスケットの中にいたから、木の下では眠れませんよ、きつと。おばさん、とても親切ですね。けど、ぼく、じきにお家を探せますよ。」

「あら、そうですか。では、無事でおさがしになれるように。あなたは、ほんとうにいいねいな方ね。」
と言つて、スカンクのおばさんは行つてしまいました。

子猫君は歩き続けました。太陽は沈んで、あたりがぼんやりとしてきました。そのうちに、子猫君は、やさしい目の動物に会いました。二匹の赤ちゃんを連れて、道をびよんぴよんとはねて行くのでした。それは兎でした。

ニヤオ、ニヤオ。」と、子猫君が疲れた、小さな声でいいました。すると兎は、

「おや、どうかなさつて？」と、親切にたずねました。

「お家が見つからないの。」

「まあおかわいそうに、いつしよに、私のお家にいらつしやい。あなたが。私の赤ちゃんをうるさならなければ、私、むこうの原つばに穴を作つてあるのよ、木の葉でまわりをかためて、とても住みよいお家よ。」

けれど、子猫君は気がむかないのでした。

「ぼく、穴の中に寝ることはできないよ。おばさんとても親切にたずねて下さつたけど。ぼく、お家のバスケットをさがしますよ。」

「まあ、あなたのさがしていらつしやるのがバスケットなら、私、どうしようもありませんね。では無事に、おさがしなさいね。」兎はやさしく言いました。

子猫は、また歩き出しました。あたりは、静かでした。春の夜の原つばは、あたたかで、よい香がしました。

子猫君は、急に立ちどまつて、耳を立てました。遠くの方から、人の声がきこえてきました。子猫君はうれしくなりました。どこかに人がいるのです。人がいれば、お家もバスケットも、それからミルクもあるのでしょう。子猫君はかけ出しました。きつと近くにお家があるのだと思つて。

とうとう小さな道に出ました。それを行くと、間もなく、小さな、小さなお家にきました。それはうす暗くて、音一つないところにあるのですが、それでもなんだか、うれしそうに思えました。玄関のドアの近くに、いすが一つありました。子猫君は、その上にとびのつて中をのぞきました。ドアの取手になにかかけてあります。暗いのですが、子猫君には見えました。それはバスケットでした。——まるいバスケットでありました。

「やあ、お家だ。」と、子猫君はうれしさとで咽喉をならしました。そして見事にとんで、バスケットの中にはいました。バスケットはその時、ゆらゆらしましたが、ドアの取手に結んであつたので、落ちはしません。子猫君は、ヴァイオレットやカウスリップや、よい香のヘパティカ（すはまそう）などでとりまかれた、やわらかな青い苔のベットの中に入るのでした。よい気持ちになつて、いつの間にか眠つてしまいました。

あくる朝、早くドアが開きました。子猫君は伸びをして起き上りました。

「ニヤーオ、ニヤトオ。」といつて、カウスリップやヴァイオレットやヘパティカの間から、外をのぞきました。その時、

「あら、あら。どうしたのだろう。」と、とてもやさしい声がしました。ひとりのおばあさんが、子猫君を見ています。

「ニヤーオ、ニヤーオ。」また子猫君はなきました。

「まあ、だれかが、私のために、五月祭のバスケットを、おいていつて下さつたのだよ。」と、おばあさんは言いました。「お花に。苔に、子猫を一匹。ちよと私のお友だちになるように。」

おばあさんは、大喜びでした。だれが、そのバスケットを、ドアの取手にかけておいたのか、それは後でわかりました。けれどどうして子猫が、そこにはいつたのかは、だれにもわかりません。うす墨色の子猫君のほかには。

(エリー・フエアナチャイルド・ピーズ女史の作による)